

圓滿寺報

第191号

令和4年9月1日発行

天台宗 別格本山 安禅院円満寺

〒220-0061 横浜市西区久保町50-1

電話 (045) 231-4383

FAX (045) 241-4499

http://enmanji-yokohama.jp/ e-mail:enmanji@xb3.so-net.ne.jp

世界宗教者平和の祈り集い開催さる



壇上にて祈りを捧げる各宗教者代表(比叡山延暦寺)

安禅院第四十世 住職 西 郊 良 光
円満寺第五世

今年には比叡山宗教サミット三十五周年の節目の年となるため、三十五周年を記念して各国よりの宗教者を招き、開会式・祈りの式典と二部構成で世界宗教者平和の祈りの集いが行われたのであります。

令和四年八月四日、京都市国立京都国際会館で第一部、開会式と記念講演、シンポジウムが行われ、第二部の世界平和の祈り式典は比叡山上特設舞台上で行われました。

第一部の記念講演は財団法人日本総合研究所会長、寺島実郎多摩大学学長が「歴史的な大転換期における宗教―心の回復力を求めて―」と題して講演されました。

その後シンポジウムが行われ、テーマは「気候変動と宗教者の責務」と題して四人のパネリストによる発表が行われました。パネリストの四人は各宗教の教義と今日の世界の状況について神社代表、キリスト教代表、イスラム教代表、平和会議団体代表とそれぞれの代表によって意見交換が行われ、まとめとしてコーディネーターより集約され、シンポジウムが終了致しました。

そして第二部は平和の祈りの式典を比叡山上で行ったのであります。午後三時半に平和の鐘の鐘打、互いに黙禱、比叡山メッセージの朗読、そして各宗教の代表者による祈りが捧げられたのであります。

今年には三十五周年という記念の年でありましたので海外より代表が来日された団体も多数ございました。平和の祈りでは各宗教の代表、一、教派神道代表、二、仏教代表、三、キリスト教代表、四、神道代表、五、新日本宗教団体連合会代表、六、イスラム教代表、それぞれの祈りが捧げられ、イタリア、ローマより来日の聖エリコ共同体ジョパリヨリ師の祈りが捧げられ各宗教の祈りが終了。最後に天台座主大樹孝啓大僧正により最後の祈りが行われ、共に世界平和を祈ったのであります。

天台座主の祈りの最中に雷が発生し大雨が降り、天候の乱れがあり、まさに気候変動と宗教者の役割について大いに考えさせられたのであります。とにもかくにも無事に世界平和の祈りの集いは終了する事ができました。

サミット写真



登壇する大樹孝啓天台座主



シンポジウムに出席する当寺住職



アショカピラー法塔前法要(写真中央 西郊良貴副住職)

副住職 東大寺にて
「花まつり千僧法要」に出仕

四月二十六日に当寺西郊良貴副住職が理事長を務める全日本仏教青年会が主催する「仏法興隆花まつり千僧法要」WFBY五十周年慶讃記念法要「世界の平和共に祈りを捧げる」が奈良・東大寺にて開催されました。

千僧法要は文字通りの毎年、全国各地の各宗派、各青年会から沢山の僧侶が参加し祈りを捧げる行事です。コロナ禍前は五百名以上の僧侶を集めての行列、法要を行っていましたが、コロナウイルス感染拡大防止の為に昨年、一昨年は東大寺院内の僧侶のみでの開

催となり、従来通り各団体からの僧侶を集めての法要としては三年ぶりの開催となりました。

従来通りとはいえ今年も感染防止対策を講じた上での実施となり、法要時間を短縮した上で一団体三名以内、大幅に人数を制限した上での開催となりました。

また今回は、WFBY世界仏教徒青年連盟(世界各国の青年僧の連合団体)五十周年を記念した法要となり、当日は谷晃に全日本仏教青年会理事長を導師とし、全日本仏教青年会副理事長として当寺副住職、村上博雅WFBY会長をはじめ東大寺様、南都二六会様他、各地の団体代表者約四十名の僧侶が出仕し法要が執り行われました。

午前中に東大寺総合文化センターにて受付、着衣ののち、金鐘ホールにて開会式並びに鷲尾隆元東大寺教学執事を導師として新型コロナウィルスの早期終息を祈る「正午の祈り」をお勤めしました。

その後、行列を組み大仏殿に入室、ご本尊である毘盧遮那仏御宝前にて散華や大般若転読といったお勤めを行い、世界の平和と安寧を祈念いたしました。

大仏殿法要終了後、例年併せて行われているアショカピラー宝塔前法要を



東大寺大仏殿にて法要(写真手前 西郊良貴副住職)

倉本蕤恵南都二六会会長を導師として執り行いました。アショカピラーとは、インドでお釈迦様ゆかりの地にアショカ王が建造したとされる石柱のことで、そのアショカピラーを模して、花まつり千僧法要を記念して造られた塔であり、毎年沢山の僧侶がこちらをお参りするのにならわしとなっております。(一般の方も法要の時以外はお参りが可能です)

例年より規模は縮小されたものの、法要の様子はオンラインにてライブ配信がなされご視聴の多くの皆さまと心ひとつに、共に祈りを捧げる事が出来ました。今後も感染予防に気を付けつつ、粛々と活動を続けていく所存です。

秋彼岸会によせて

秋のお彼岸の時期となりました。仏教では我々、生きていく人間の住む世界を此岸(こがら)と呼びます。一方で亡くなった方が行くところは彼岸(ひがら)と呼んでいます。極楽浄土といわれる、安らかに過ごせる世界が死後には広がっているのだ、と考へられており、様々な法要も故人に極楽浄土へ行っていただく「事を願って行う方が多い」思います。

平安時代にお経を転読したという記録が残っておりますので、少なへとも一〇〇年前から春のお彼岸や秋のお彼岸にご供養をする風習があった、という事になります。

近年、価値観が多様化してきたと言われて久しいですが、変化の激しい人類社会の歴史において、仏教は約二千五百年、お彼岸の風習も二千二百年という時を刻んでまいりました。日本の天台宗も一千二百年という節目を達成いたしました。長く定着している供養は、それだけの人の想いを繋いでいっているという事でも過言ではなございません。

日々沢山の情報が流れ、時には心が乱れる時もあるかと思いますが、お彼岸等の節目の際は是非とも先祖様へ気持ちを寄せ、お手合わせしてみませんか。「情けは人のためならず」のことわざ通り、きつと皆様の心の平穩にも繋がると思います。

(良壽記)

永代供養について

永代供養について、いくつかのケースに分けて解説をいたします。

①既に円満寺にお墓を持っている

「今のお墓を葬じまいして、永代供養墓に移す」という方法で「今のお墓を残したまま永代供養にする」という方法がございます。お墓を残す場合、現在のお墓の状態や、以後どのくらい年数お墓を保存するか等々、「重要に感じながら永代供養を行っております」。

②円満寺以外のお墓を持っている

て、既に納骨している

円満寺以外のお墓から円満寺のお墓(永代供養墓)に改葬(お墓の引っ越し)をして永代供養を行います。今持っているお墓の種類によって手続きや(引っ越しの)費用が異なっておりますが、ご相談ければお手続き

や費用の概算が把握できるようお手伝いをいたします。

③今お墓を持っていないが永代供養をききたい

「永代供養墓」のご検討がよろしいかと存じます。資料等の郵送も行うております。

お問い合わせ

〇四五―三三三―四三三三
担当 西野まで

「永代供養の件で」とおっしゃって下さいませ。



永代供養墓「沙羅双樹の杜」

円満寺は「おてらおやつクラブ」に

参加・協力しています

「おてらおやつクラブ」とは、お寺でお供えされるお供え物を「おまがり」として、経済的に困難な状況にある子供に「おすそ分け」する慈善活動団体です。

当寺も平成28年よりこの活動に参加し、「ご法事や大法要の際に頂戴致しましたお供え物の一部を「おまがり」として「おすそ分け」させて頂いております。

先般おてらおやつクラブから会報誌が届き、その中にも記載されていましたが、「コロナ流行後に生活困窮

ろ、「おてらおやつクラブ」を經由して贈っているお菓子や食べ物だけでは経済状況を大きく好転させるには至らず、力不足を痛感する時も多いのですが、それでも支援家庭のアンケートでは直接支援を受けて「心理的に良くなった」との回答が九五%を占めた、この事でした。

身体的・経済的に苦しい時は、孤独を感じると堪えるものなのです、引き続き法務の合間におやつクラブへの支援を続けていければ、と思っています。

こうした活動も、檀信徒をはじめとした皆さまのご理解・ご協力があってこそであり、ご協力に御礼を申し上げると共に、今後も支援の輪を少しでも広げてゆけたら、と思っております。

ごこうした活動も、檀信徒をはじめとした皆さまのご理解・ご協力があってこそであり、ご協力に御礼を申し上げると共に、今後も支援の輪を少しでも広げてゆけたら、と思っております。

※ おてらおやつクラブ会報は、ホームページよりご覧いただけます。
<https://otera-oyatsu.club/2022/07/tebanasub/>



てら
おやつ
クラブ
おてら
おやつ
クラブ

家庭からの支援の要請が急増し、おてらおやつクラブで支援する家庭の数は二〇一九年と比較して十六倍となりました。
正直な言い

編集後記

円満寺をはじめとする近隣のお寺はほとんどが七月にお盆の法要等を行っていますが、横浜市内でも八月にお盆を行う地域もあります。また、沖縄等一部の地域では旧暦でお盆を行う為に毎年日にちが変わる、といった事が起こります。なので、お彼岸の日にちは全国共通と思いますが、お盆の日にちはわかっているだけでも三パターンある、という事になっています。

こういった事になったのか、と

というのは諸説あるのですが、明治時代に政府が旧暦から新暦への変更を行った際に新暦を定着させるべく、新暦つまりは今の円満寺と同じ七月盆への切り替えを都市部を中心に強く促したから、という説が有力です。東京や神奈川等で七月盆が多いのはこの理由と考えられると納得できます。

しかし一方、「誰が何と言おうがお盆は八月」という考えも当時根強かったのが、旧暦のお盆を続けた地域もありました。ただ、そのお盆の前述の沖

縄のように新暦基準で毎年日にちが異なる混乱を招きやすいので、旧暦の日にちに近い八月十三〜十六日を八月盆の期間と定め、八月盆の地域として定着した、という事のようにです。

この寺報の編集後記を長い間書いて下さっていた良俊さん(住職の次男)は今、都築区の観音寺というお寺で住職をつとめておられますが、こちらは八月盆で法要を行っており先日私も手伝いをさせていただきました。逆にこちらのお盆やお彼岸の時期は応援に来て頂く事もあり、こうした情勢ですがお互い行事や法要がなんとか行えているのは本当に有難いことだと思っています。

今年も体温を超えるような最高気温が珍しくない夏となりましたが、これだけ気温が上がっていると今まで普通に行っていた事も、時としては危険が伴うようになってしまつケースが出てきています。まだまだ暑い日が続きそうですので、くれぐれもお墓参り等の際は、日傘を頂戴して、細心の注意を行って下さいませ。(良俊書記)

しかし一方、「誰が何と言おうがお盆は八月」という考えも当時根強かったのが、旧暦のお盆を続けた地域もありました。ただ、そのお盆の前述の沖